

方言研究における「未開拓の分野」

藤原与一

学問上の厳格な要求は、日に月に進歩する。つねに高まってやまないその時々新しい要求からすれば、どの道の研究もすべてじっさいには未開拓と言えるであろう。方言研究もまた、今日は今日なりに、いろ／＼の面で、未開拓と言える。方言の研究が、「方言」(体系的存在)という言語の研究であつてみれば、研究の未開拓ということも、多くの事項にわたることは明らかである。

以下、現代方言の研究についての、現段階での「未開拓」を、私なりに、考えてみたいと思う。

一

方言の研究は、何よりもまず方处的研究である。これは、方言という語を、地方語の体系的存在の意にとるのではなくて、地方語の一々の特殊的事実の意にとる場合であつても、ひとしく言えることである。方处的研究であるからには、地方々々の方言が、地域的にいって、できるだけ精密に研究されることが、もっとも望ましい。地域的開拓は、方言研究の本旨である。しかし、現在の研究段階では、この点、なおはなはだ未開拓であると言えよ

う。

方言調査ということは、そうとうに長い年月の間なされてきたけれども、こまかく地方を見ていくと、今なお、その事態の判然としていない所が多い。そこ／＼についての、研究の深さ・正確度などのことはしばらくおき、ともかくも作業がなされたということで地点・地域を見ていったのでも、上のようなことが言える。たとえば九州地方でも、肥前西岸・肥前島嶼の諸地域のことには、まだよくわかっていない。日向の山地部一帯にしても、その真姿は、よくわかっていない。中四国地方にきても、内海の島々で、事態不分明のものは多い。山陰のうち、隠岐諸島の比較調査なども未開拓である。中国山脈の脊梁地帯が未開拓であり、四国の土佐山地・阿波山地も開拓途上である。近畿以東についても、いろ／＼の地域が指摘できる。手近の若狭湾岸が未開拓であるとか、近畿南辺地帯が未開拓であるとか、東海道のたとえば渥美半島が未開拓であるとか、関東西北部山地帯が未開拓であるとか、福島県西辺・岩手県東岸・青森県両半島辺陲地域その他が未開拓であるとかいうようである。思えば、だじしな所が調査し残されている。というよりは、従来の調査によって、だんだんと、未

開拓の重要地が考えつかれつつあるのである。

早くから重要性は気づかれつつも、研究開拓のまだ全面的には進歩していないのは南島方面である。薩南の島々をも含めて、奄美大島群島以南の要島を、順おしに精査していくことは、緊急の重要課題であると思う。能登は近來注目をおびるにいたったが、能登半島を主体とする北陸方言の本格的な究明は、これからのしごとであると思う。

今日までに、調査研究のなにはどうかはおこなわれた所について見ても、その成果を検討するならば、今日の新しい要求からすると、なお研究の未開拓を言わねばならぬ方が多い。今までの発表では、たとえば、単語を排列した「方言集」の形がよくとられた。この場合、その語の使用例（文例）は、語のおもなものについても、示されていないことが、少くない。語について、それを使用する時の気分なり感情なりを、註してはいないことが多い。まして、使用の頻度、盛衰の度あい、おこなわれる階層、使用された場合の品位などについては、多くは、ふれられていない。これでは、方言という世界の、生きたことばの、その生きてはたらいっているじっさいのありさま、つまり、ことばの現実・生命は、不明ということにならう。こう考えると、そのような方言集の成果だけでは、研究の未開拓ということになる。

一言で言えば、これまでの方言調査は、単語本位の調査研究であった。今後望まれるのは、その単語本位の見かたを、文表現単位の見かたに引き上げることである。文表現単位の形でとらえることを、方言事象把握の原則・基底としなければならぬというこ

とである。この理念でいけば、これまで作業のなされた多くの地点・地域についても、なお新作業が必要とされよう。

今日までの調査研究で、よし、くわしい観察がなされ、深い考察がすすめられ、精細な記述がこころみられている場合でも、万一、研究者の、聞く耳がわるくて、事実の正確な把握ができていなかったら、これは、人の知ると否とにかかわらず、研究の未開拓と言わなくてはならない。

今日までの方言文献は、その資料性が、じつにまちまちである。あるものは学校生徒の報告をまとめたものであり、あるものは、臨地調査の結果に通信調査の結果をまぜたものであり、あるものは、かれこれの先行文献によったものであり、あるものは、古老からの精密な聞きがきに成ったものである。その他いろいろの場合がある。これらのおの／＼に、かつは必要な年代づけなどもなかったとしたら、私どもは、諸地域上にならぶこれらの資料にわかには、比較法の材料につかうことはできないであらう。この種のことは、どのように厳密に考えても、考えすこしはない。

現段階が要望されるのは、全国にわたって、標準的な調査地点がいく箇所か選定され、一定期間に、（すなわち、ある年代づけを期待して）この全地点についての、一定条件下の、理想的な調査研究が実行されることである。これができあがれば、すくなくとも、確乎とした基準・観点による比較研究は可能になる。この一本線は、旧来の諸資料を、批判的に処理するうえのよりどころとなるであらう。

理想を言えば、かぎられた標準地点が、多いのにこしたことは

ない。多くて、全国に、くわしくまんべんなくいきわたるようであれば、もつともよい。

従来はとかく、奇異の地点・現象をえらぶかたむきがあった。いわゆる「変わった所」に目をうばわれることが多かった。それもよいが、一方では、どこに変わった所があるかもしれないと考えることもまたたいせつである。山村や離島でなくて、大小都市のまん中も、しばしば、おもしろい変わった所である。「変わった所」をかんだんにきめてしまうことは有害である。

のみならず、変わった地点現象にばかりとらわれることは有害である。変わっていないといちおう見られた所が、じつはだいたいな国語事実を示すことは少くなかろう。もつとも重要な国語事實は、もつとも平凡なかたちでよこたわっているかもしれない。私どもは、もつと虚心に、日常・普通ありきたりの中に、国語の眞実を、その体系的なうごきをとらえるように考えなくてはなるまい。

私自身、初期のころは、変奇を求め追う心がつよく、恩師の御注意もなか／＼耳にはいらなかった。なんぎして、たとえば山中海辺があるき、それで、特別の使命感をおぼえもしたのである。

△このようなことは、方言研究というものの、最初の宿命的な過程でもあるか。▽が、私は、肥後の五カノ荘などがあるき、阿波の山地をすこしあるきなどするうちに、だん／＼と、平野のどまん中にもだいたいな調査地があることを思うようになった。あそこはおもしろい、おもしろくないの方言研究ではいけないことがだん／＼わかってきたのである。今は、どこもみな、おもしろい。一

一 討究すれば、どこでも、いくらでも、重要な事実がとりあげられる。どこに行っても、そこには、国語が生きて脈うっている。正視すれば、把握の興味と関心とは、つよまるばかりである。

言語生活の伝統というものは、じつに根づよいものである。ことはは、ずいぶん変わらぬものである。昭和二十年前後の世上の動きをへてきて、今日、依然として、私どもは、古い言語事実を多く調査し得る。もつとも、このような探究は、現今の六十才前後の人たちがこの世を去ってしまったば、そうとうに不如意となってくるであろう。それはそれでよい。私どもには、その時々々の地方語現象という対象界がある。国語研究としての方言研究の、正当な関心は、つねに、時代々々の地方口頭語界に、まんべんなくはらわれるべきである。

二

方言の研究も、これまで、一般の言語研究の方法のとおりに、音韻・文法・語彙語詞というような観察部門を立ててきた。

(一)

まず、方言は音声言語の世界である。これの把握が音声的ないし音韻的記述になることは当然であろう。こうして、「方言音韻」の研究がおこなわれてきたのである。

ところで、今日の進歩した音声学および音韻論からすると、今までの研究は、音韻と言って音声の現象を追うこともあった。音声学的と言って、じつは音韻論的であった。このような点に関

しては、服部四郎博士の「音韻論から見た国語のアクセント」(国語研究二号)がもつとも教示に富む。その

音声学的な見方と音韻論的な見方とを十分自覚的に明瞭に區別し、音韻論的な見方を更に徹底させる必要がある。

とのご主張にしたがうかぎりには、今までの方言音韻の研究は、大部分、素朴なものであったとされるであろう。音韻論的な見方が徹底せしめられるほど、一方、音声学の観察は微細をきわめる。この、二にして一の力は科学討究の俥力であるが、方言の音声表現の世界は、いたるところで、このつよい力による討究をまわっていると言えよう。

それにしても、たちまち逢着する困難な問題は、調査研究者の耳のことである。元来、音声を聞きとる力には、優劣の差がはげしく、しかも、人はしばしば、このことに、深刻な自覚を持ってはいない。これはじつにおそろしいことである。今さらのようにこのことに気づく私は、自己の耳の力のよわさを悲しく思う。そうして、自分の今まではどんな態度の聞きかたであつたらうと反省する。音声の微細を聞くことにつとめた。しかし、音声観察そのものを正確に表記することはできなかったのである。それにしても、調査地での、すなわち、一方言を対象としての聞きとりでは、そのような自然的な音声観察のうちに、音韻論の定着をはかつたように思う。

しかし今、たとえば服部博士のお耳のようなすぐれた実例を思ふと、ただに、「自己の限界を知つて」とか、「謙虚に忠実に」とか言つていたのではおつつかないことを痛感する。すぐれた耳

からすれば、世上の多くの耳の作業は、ことごとく不満足なものであろう。今や、一般には、音声学の修練の厳密と、音韻論的考察力の深化拡充とが、つよく要求されていると言える。

今までの程度のことについてみても、方言音韻の解明は、地域的に、なおいろいろの点で未開拓である。たとえば、いわゆるガ行鼻濁音の分布や、いわゆる鼻母音の存立・分布も、その状態が精叙されるところにはいっていない。調査の目をつめていくことは、ここでもつよく要望される。

一つの方言について、音声学の観察と音韻論的考究とがほぼつくされた場合は、その方言(という全体像)について、その発音生活の特色を論ずることができよう。究極において、方言という団体の言語生活の特色が語られることは、方言研究として、望ましいことである。

アクセントに関しては、なおいくらかのことを言い得る。

地方の研究によつては、時にまだ、二音節語その他、かざられた音節語についてのアクセント調査がなされて、それで、方言アクセントの地方的相違が云々されることがある。言語の、このよるな単純な一般論化は危険である。ただに「アクセントの相違」と言われれば、人は、地方アクセント体系の相違をも思ふであろう。ところがじつはこれ／＼の音節語にかぎつての作業であるとするならば、アクセントの地方的相違の説明には、「何音節語の調査による結果」との註記が必要である。

また、語アクセント上の、あるかざられた事項について、地点を追つて調査をしていき、これらをくらべようとする場合にも、

たとえば甲地では青年の男子に聞き、乙地では老年の婦人に聞くといったような不統一が、まゝ、ひきおこされている。調査上、位相をそろえることのたいせつさは、つよく考えなければなるまい。

おの／＼の方言について、各種音節語の語アクセントが精査され、地方語アクセントの体系が究明されるようになれば、このような結果のうえで、どんな地方比較も自由であろう。今までのアクセント研究では、語アクセントの型式論がさかんであった。ここに一つのことをつけそえてみよう。たとえば山陽地方の方言アクセントは、型式論上、だいたい、東京語のアクセントと同趣とされる。両者はおおよそ系統を同じくすると見られてきたのである。だのに、たとえば広島人が、三音節語について、東京語の「ウチワ」（うちわ）というのを聞くと、自分らは「ウチワ」と発音するところから、奇異の感をいだく。また四音節語名詞について、「イモートガ」（妹が）というのを聞くと、自分らは「イモートガ」と発音するところから、奇異の感をいだく。型式そのものは、たとえば三音節語で、彼我そのアクセント体系を、だいたいひとしくしていても、ひとたび現実の語のアクセントを見ると、両者はしば／＼一致しないのである。じつさいには、このようなくいちがいの経験を多くつむのとともに、「方言」意識は高まるのである。二つの方言があい並ぶところでは、その一方の方言人は、となりの方言のある一つの語アクセントを聞いてもものしだいでは、それでただちに、彼我の方言差を意識する。一方言社会のアクセント生活の方言的実質は、個々の語のアクセン

トの聞こえの事実——その集合の体系的事実からきまってくるとも言えよう。型式に語をあわせて観察する研究は、どのように展開させていったらよいものであろうか。

文アクセント（抑揚）の研究は、ことに未開拓である。地方々々の方言アクセントの文表現の抑揚に、いろ／＼習慣的な傾向があることは気づかれているが、これの討究はまだ進歩していない。じつさいの方言生活の方言性を明らかにするために、この特定の文アクセント傾向をとらえることが、だいいじな研究となる。諸方言を通しての文アクセントの研究もまた重要である。

九州西南地方の語アクセントは、形式上、京阪式と見られている。ところで、九州西南地方の文アクセントは、そのおもな傾向が、京阪地方の文アクセントのおもな傾向とは、はなはだしくちがっている。このようなことのうちには、深究すべきおもしろい問題が多かるう。

(三)

つぎに、方言文法の研究に関して考えてみよう。

地域の未開拓についてはもはや言わない。ここには方法論上のことを考えてみるのに、ただだいのところでは、今日、方言文法事実を、方言の実態に即して分析把握する手法が、まだよくは秩序だっていないと言えよう。

もとより、方言という言語体系は、個々別々に、大なり小なりそれぞれの特徴をそなえている。したがって、彼への方法は、此への適切な方法になるとはかぎらない。方言に対処することに、適当な分析把握の方法が案出されなくてはならないわけである。

しかし、それらのすべてにわたるべき、方言文法研究の精神は、確立されなくてはならないであろう。方言文法研究の一般的方法というものは、原則的に、考えられるはずである。

旧来の方言文法研究には、それまでの、いわゆる標準口語法の記述法に引かれたものが多かった。たとえば助動詞の活用を問題にしても、「活用表」をかかけておわるといふようなところがあつたと思う。が、方言文法の研究としては、助動詞の一つをとり出すにしても、こんな活用形がこのようにつかわれているといふようなとり立てかたがおもしろいのではないか。助動詞によっては、一活用形のみを生命を以て存立しているものもある。その事実をほりさげ、他の類似の助動詞の活動と対比してみることは必要である。活用表の機械的な整頓よりも、活用形おの／＼の生きかたを精叙することが必要であろう。考えてみると、このようなことは、なにも、方言文法研究にかぎっての必要事ではない。

方言文法という点、すぐにこれを特殊視する風がある。特殊視して、そこに、特殊な文法研究、研究法を求めがちでもあつた。これらのことは、改められなければならない。方言文法は、現代口語法の、生きてゐる一つ／＼のすがたなのである。言いかえれば、現代口語の口語法のはば、と奥ゆきとが、国語方言の世界に示されているのである。それゆえ、個々の方言についての文法研究は、その対象に即しての国語法研究であると言へる。とすれば、方言文法研究の方法が、ただに方言研究の場合にだけとどまるものでなくてよいのは当然であろう。

ただ、方言という対象は、かぎられた、特定の対象である。一個具體の対象に直面しては、そのものをそのものとして見すえるすなおなまなこ、こだわりのないまなこがいる。その目で方法文法が正視されるならば、その対象に對して、どのような特殊な把握法がとられようとも、それは、国語法研究の自由な方法としてゆるされるであろう。そのような自由な方法は、多くさかえるほどよい。

方法として、一般的に考えられることの骨子は、方言文法の個々の文法事実を、一方でどこまでこまかく割つていき、他方でどこまで大きくまとめてとらえていくかということである。文法機能の精細を見るのに、どうしても右に言う二つの方向がある。

こまかな分析が、方言表現の特質をうちこわすものであつたりしてはならない。大まとめのうけとりかたが、方言表現の味わいというようなものをばくぜんと味わうようなものであつては不徹底である。ものの構造が厳密に追求されるとともに、そのものの表現価値が正確にとらえられるようであればよいのであろう。

いわゆる体系的な考えかたと、いわゆる表現論的な考えかたとは、はなれるべきものではない。用語の不徹底はそのままにして言へば、この二つは、一つに合致すべきものである。表現論的操作は、体系的論的処理をつつむものでなくてはならない。このような理念によつて、個々の方言方法（という体系的態度）が記述されるならば、それぞれの方言ごとに、特色のある記述が見られることにならう。

今までの研究では、記述の肉迫力のよわさが目だつた。たとえ

ば、方言文法の一々の事実をあげてこれに共通語訳をつけること一つにしても、その引き当てが、安易にすぎた。「……ダドモ」とあつても、「だが」と訳してかえりみなかつたりした。もとより、対訳をほどこしかねる場合が少くない。じつは、そこをどう苦心して説明するかが、記述のほねとも言えるのである。敬卑の待遇表現の例など、その微妙な待遇心理は、かんたんな訳文では述べつくせないであろう。

表現の法としての個々の文法事実を、その音声形態の微細に即し、感情価値の仔細にしたがつて、的確にとらえつくすことが望ましい。方言の現実には、そのような討究と把握との可能を、特に音声相というかたちで、私どもに見せつけている。

(四)

つぎは方言語彙の問題、方言の一々の語詞の問題である。

この方面は、研究がもつともおくれいているであろう。従来、単語集はあつても、方言という体系的存在についての、理想的な語彙調査、研究は、まだほとんどあげられていない。語彙という体系的事態の認識そのものが、まだ時に不鮮明なありさまである。

一個の方言について、その語彙が、秩序よく記述され、整理把握されたとするか。この上に立って確実に言い得ることに多い。また、それを言つて効果のあることは多い。たとえば、一方言社会の児童たちが、周囲の、うごく「動物」とうごかぬ「植物」とに対して、どのような反応差を示すかというようなことは、この二つの方面の、かれらの生活語彙をこまかく比較することによつ

て、くわしく論定することができる。この比較によつて、私どもは、人間の命名心理の発展方向というようなものをつかむこともできよう。形容詞の貧弱というような話題も、一個方言共時態の語彙統計によつて、厳密に検討することができる。形容詞は形容動詞によつてどのくらい助けられているかも明らかになる。形容詞を製作するのにどんな方法がとられ、中でもどんな方法が特によくとられつつあるかというようなことも、こまかにしらべることができはるはずである。人倫関係の語彙では、とかく、非難その他、押さえる方面の語詞がさかえて、推賞方面の語詞は少いかのようであるが、方言語彙の精密な把握ができあがれば、このような問題は、数量的に、あざやかな結論をみちびくことができよう。その結果からは、方言社会の社会、道徳観念を、その性格を、考えることができるはずである。

方言語彙の本格的記述が、それこれの方言についておこなわれれば、それら諸方言について、興味ぶかい比較をこころみることができ。たとえばさきの形容詞の語彙量を、甲乙以下の二、三以上の方言について、比較してみることができ。語彙比較ということは、もつとも興味の深いことであろう。この点では、一方言についても、時代ごとに計画的な記述をおこなうていけば、文字どおり、語彙の推移・推進・歳史をしらべていくことができ

る。方言語彙に関する根本的な考えかたとして「生活語彙の体系」という考えかたがだいじであることは、すでに明らかであろう。方言の、その生活語彙体系に対しては、適当な分類方式が用意さ

れなければならぬ。そうしてこれは、一個特定の方言ごとに、動的なものでなくてはならないのである。山地の方言社会の方言語彙の分類成果と、海辺の方言社会のそれとは、差別のあるのが当然であろう。生活の領域分析をおこなうことによつて、軽重の別をつけた生活語彙分類をいたすことができる。分類は、それ自体、特性的な方言生活を説明する。

方言語彙研究の成果を、今、世に発表するとしたら、種々の制約からして、その語彙の全体を発表することは不可能であろう。いきおい、その簡約体系を以て満足しなければならないことになるが、ここでもまた、その簡約化の方法として、生活語彙体系の考えかたが役だつ。

今まで、たとえば「かたつむり」についてというように、一名目のものについて、広くよこに、その異称の分布をしらべることがおこなわれてきた。いわゆる言語地理学的研究である。この場合も、しごととしては、語の多数を問題にする。その、これまでに注目された特殊な名目は、それぞれに、研究価値を持ったものであるが、その名のもとに取り上げられた資料には、信頼度に高下があった。したがつて、従来の研究には、なお十分には信をおきかねる点がある。通信調査で「めだか」の呼び名をたずねたとする。ある土地の男青年はこれに「ハ、エンゴ」と答えたとする。はたして「めだか」のことなのか。不安である。

方言の二々の語詞に関しては、なお、語詞形成（語構成）の問題がある。方言の世界には、日本語の造語法のきわめて日常的なものがかかんにおこなわれており、その産物は豊富である。国語

の造語法の研究のためには、この方面の解明が急務とされよう。

三

ここであらためて、方言についての、事象の総合的把握を考へてみる。

分析的究明に対して、総合的把握が必要であることは、多く言うまでもない。分析的究明は総合的把握を予定する。

方言研究の場合は場合なりに、方言というものの性質に依じて総合的把握の必要が考えられる。

方言という体系的存在は、相対的にはあるが、いろ／＼の条件のもとに、その方言的性格・方言的実質・方言的特性を高めてゐる。方言には、全体印象的な「方言らしさ」方言性があることは否めない。方言研究はまさに方言の研究である以上、最後にはこの方言らしさを、一つのだいたいな問題にしなくてはならないであらう。

方言は、「人」に即してみれば、毎日の方言生活である。その生活が一定の生活圏を——その輪廓は明瞭ではないが——成しているのが方言社会であり、方言社会ごとに、特定の方言（というまとまり）が考えられる。このような渾然とした口語生活は、一面発音生活であり一面文法生活であり一面語彙生活であらうけれども、帰すところは、毎日の方言生活である。とすれば、方言生活から二々の方言事象をとりあげるのにも、事象の総合的な把握——音韻とか文法とかの見かたを統合した、機能表現性を本位とした、したがつて、こまぎれな要素よりも大きなまとまりをとら

えることになる。とらえかたが必要なことは明らかであろう。生きたはたらく表現のすがたを追求して、その構造をしらべ、そこにこめられた気もちはたらきをこまかく見ていって、方言事象、すなわち方言生活の直接単位を、その躍動のままにとらえることが要求される。

このようなことは、なにも方言研究にかぎられたことではない。すべての言語研究が、その事象の把握において、よく、ことばの生命をとらえるものでなくてはならないことはもちろんである。が、たゞ、方言研究では、方言が純粹口頭語の世界であり、方言社会は特定のまとまりの社会なので、方言を独特の言語体系としてうけとることが容易である。方言には、生活語体系としての特異なまとまりと、その性格とが、みとめられやすい。このようなものに関しては、総合的把握の実践を、おもしろくくふうすることができよう。これによって、言語記述のある面目を発揮することができると思う。

ことばは人間の生活行為であることを、私どもは方言研究で、つよく考えたい。方言は、生活語とも方言生活とも言いかえられてよい。この生活の事実を究明するのが、私どもの生きた生活語学でなくてはならない。人生を高めていく生活語学が要請される。これにこたえるためには、人間のことばをまさに人間のことばとして把握する、事象の総合的把握の手段がいろいろ。

別に、東条先生は、つねづね方言区画論を唱導され、かつ「方言区画は音韻・文法・語彙の全体の考慮の上で設定されなければならぬ」（『国語学辞典八五七頁』）と言われる。こういう意味の

方言区画の確実な認定のためには、今後なお多くの研究を積み重ねばならぬであろう。

四

方言研究にとってもっともたいせつなのは、方言の体系的記述であると思う。方言は体系的な存在であり、体系的な存在として、一定の特性を以て立っているからである。

それゆえ、方言の研究は、まず、共時的に、共時方言学として定立されるべきである。西洋の方言研究は言語地理学的展開に異常な進歩を見せたが、言語地理学はまさに言語の地理学であって、これをすぐさま方言の学、あるいは方言学の全部とはしたがたい。方言は、その一々の事象が地理的分布の事項と見られる前にも、まず、方言という、まとまった生活の、体系的形態として見られる。これを直接にとらえることが、方言研究の第一義であることは明瞭であろう。

さて、方言というまとまりは、下位区分的にも上位区分的にもとらえることができる。方言という特定共時態は、ついには、日本の全土の上で、一大日本語方言共時態としてとらえられるであろう。そこまできかなくても、ある程度の地域のひろがりをおおう特定共時態の把握にいたると、その中では、いわゆる言語地理学的な操作をほどこすことができる。このような言語地理学がある地域の方言事象を究明することは、すでにみとめられているところである。そのような地域について、なお、その地域方言の共時的な把握記述が可能であるとするならば、高次の共時的

な研究は、言語地理学すなわち通時論的な研究を含むと言い得よう。

体系的存在の全的記述が容易でないことは考えられる。しかし方言の研究では、じつは、このような、体系的存在という対象はみとめやすいことである。そのくまどりは不明瞭であるとしても存立姿勢はうけとりやすい。特に、対象を狭くかぎってうけとろうとするならば、早くも対象は私どもに押し迫ってさえるのである。今までは、ばくぜんとある地域を対象にしたところに、あるいは、不用意にある広さを求めたところに、不徹底があった。研究の発展をはかるために、いちおう、もっとも小さくかぎった対象につき徹底的な記述につとめるのがよくはないか。

このかざられた対象を、あるいは分析的に徹視し、あるいは総合的に巨視して、結局においては、文表現本位の記述体系を得ることがもっとも望ましい。これを純粹記述とよぶならば、謙虚着実なるべき方言研究は、このような純粹記述を目的とすればよいと言えるのではなからうか。

このような記述が全国の諸地域の諸方言にわたっておこなわれれば、国語方言状態の広い状況を見わたしての、どのような個別的研究も、まったく堅固におこなわれよう。なによりも、このような記述体系の集合は、今日で言うならば、昭和の今日の国語の方言的現実として、はっきりした国語史的記述になる。私どもは過去の国語を研究して、どの時代に、その時代の口頭語の全国状態の組織的な記述を見得るであろうか。このこと一つを考えてみて、私ども、現時の方言研究者には、責任が明らかである。昭

和の今日の国語を、方言研究の立場で、明らかに記録にとどめることが緊要である。

五

それにしては、今日までのところ、何を記録するにもせよ、いまだ、記述の態度が安易であった。すべて学問は、記録の正確深到を以て身上とすべきではないか。ことに、目に見えぬ口頭語を相手とする研究者としては、「あやまりのない記録を」というぬらいを、つねに堅持してはならないと思う。

不用意な記録、あやまった記録は、これを材料として概括論をするものとして、また、説をなすものをして、しばしば大きなあやまりにおもむかしめる。おそろしいことと言わなければならぬ。

正確な知識を目的とした方言研究のためには、研究者のあくなき野外作業が要望される。所詮は実地につかなくてはならない。研究者が個の方言に向かった場合は、ひたすらその世界にうち入って、たとえばそこに一つの記念塔を打立てるようなつもりで、方言の記述体系の樹立につとめるべきである。

現状では、そのような記述体系の未完成地域的不足をうちこえて、広範囲にわたる説明の作業が急でありすぎる。分布はむずろさに云々されすぎている。「分布」ということこそ、もっともおそれるべきものではないか。「これはこの範囲にだけおこなわれる」などは、めったに言えるものではない。ものは、いつ、どこで見いだされるかもしれないありさまなのである。ツーツー弁

は、国の西部で、出雲地方のほかにも、九州や四国で見いだされた。さきごろは、群馬に文末助詞「ムシ」（もし）の分布を問いた。あわせたところ、そのお答えの中に、「ムサ」というのもあった。「ムサ」とは思いがけなかった事例である。

私はここで、いたずらに消極悲観の言辭を弄しようとするものではない。ただ／＼、分布は、厳格な注意のもとに、「ここにこれがあった」「今のところわかるのはこれだけである」と、積極的に述べてもらいたいのである。だじなのは述べかたである。何が何々地方に分布するという場合にも、語句に微細な用心がいる。

どの道のしごとにせよ、私どものおろそかな記述で、後代をやまってはならない。正確な知識、厳正な敘述を求めて心をきざむことがかんじんであると思う。

方言という体系的事態の正確な記録は、人々がその郷土語にいた時だけに可能であるのにすぎないのだろうか。否と言いたい郷土語につけば、正確な記録に成功しやすいことは明らかである。としても、方言の研究が、一個の学問研究であるからには、だれがいつどこで方言を記録しても、正確な記録法がとれるように、研究法が立たなくてはならない。そのような研究法の手引が今日なお不十分と言えよう。

思えば、考えなくてはならぬことの多い現状である。しかしこれは、私のひとり解する、ないしは外見を見ての現状論にすぎない。地方々々の研究界の店には、きっと、新しいうごきがおこり

つつあるだろう。当今の諸学の進展を見るにつけても、そのことは十分に想像される。けれども、一方には、今もなお、わりと素朴なひとりがてんも少くないことは事実である。このさい、私も、目下の方言研究について、隆盛をすぐに言うことなく、科学的な方言研究の出発点がようやくとものつてきたと考えることが、有益ではないか。（一九五六・二・一三）—広島大学助教授—